



「気候地名をさぐる」

吉野正敏 著

学生社, 1997年1月, 235頁
本体定価2,200円

本書のかなり早い段階で、著者は「時間と金と労力をかけて何でこういうことに興味をもつのか」と本書の意義を自問する。著者自らがそういうことを言ってしまったてはおしまいだ、という感じがしないでもないが、たしかにこの種のテーマにはそういう悩みがつきまとう。この種とは研究者がその分野の時代の潮流に乗った問題と離れたテーマを取り上げる場合、特に自然科学の場合は文化など人文現象に関わる論述を行おうとする場合である。しかし、こういうことを排除していると学問の新たな展開は無い。学問の自由が尊重される根拠はこの点にある。

そこまで大げさなことを考えずとも、本は面白ければよい。「面白い」という言葉が不真面目な印象を与えるならば、「ためになる」と言いかえても同じである。本書は「面白くて、ためになる」本である。まず、気候と地名という本来異種のものが関連することそれ自体が、自然-人間関係の本質を理解するための一つの重要な手がかりになろう。このことを読者に意識させる点で本書は「ためになる」。その本質が具体的にどういふことになるのかは、気候地名問題の進展を今後の研究に待つとする著者の見解に残念ながら同調せざるを得ない。このような問題提起の段階では、データの提示や分析に粗密があることもやむを得まい。著者のねらいはおそらく、これら粗密によって現在の研究の段階がハッキリ示され、その結果としてこの分野に惹き寄せられ参加してくる人を増やそうという点にあるのかもしれない。そうはいいいながら、著者が提示する事実が示す面白さに惹きつけられる段階が過ぎると、著者が部分的に行っている気象・気候と地名との関連についての解釈をもっと充実してほしい。もう一つ本書が「ためになる」のは、著者が持っている「学際

的」なるイメージ、そして自然-人間関係を「パーセプション(環境認知)」を通じてとらえようとしていることがわかる点である。また、空港での待ち時間に電話帳から本書のデータを集めた、という話を通じても著者の人柄に触れ得る。著者が我が国の気候学者の代表的存在であることからこれらの情報は貴重である。以上を前提として僭越ながら細かなことをいくつか述べる。

まず、Regensburg などにおいて、考証を加えると気候地名でなくなる例が指摘されているが、他の地名も同じレベルまで考証を加えると気候地名ではなくなってしまう心配はないのか。アイヌ地名の漢字表記にともなう気候地名については、当て字した日本人の「パーセプション」の問題として一項設けてもよかつたのではないか。

本書では、四季名の付いた地名が気候地名とされているが、四季は気候の範疇にいてよい概念であろうか。四季は気象学的(あるいは大気物理学的)概念ではないらしいことは何となく共通の認識となっているようである。一方、広義の気候、大気環境と人文・社会の関わりを考える場合、四季は気候と同格であるべきとも思える。気候についての文学的認識などを考察しようとするとき四季を含めるべきかどうか迷うことがある。評者なりの解決策は、ネタが少ないときには四季を気候にいて多いときには省くとした単純なものである。評者のそのような安易さは度々著者によりたしなめられてきたので、この件も同様にたしなめられることを期待していきさか私的すぎる疑問ではあるがここに記す。

その他、表3の注は説明不足で意味が分からない、表7の本文中の説明にあるハイフンが表中には出てこない、図9に関連する説明表が次々頁に出てくることが同図の説明に示されていない、オーストリアのSummer(夏)の考察を行う頁の指示が1頁ずれている、などは増刷に当たって修正されることであろう。

(お茶の水女子大学 田宮兵衛)